

選考資料抜粋

第六十九回コスモス賞の選考は二〇二一年の月集・その一集会員の年間作品を対象として、選者より候補者五名の推薦を求め、高野、影山、桑原、狩野、宮里、小島、木畑、大松、田宮、津金、小山、福土、藤野、風間、田中、橋、水上比、鈴木、原賀、水上美、大野、松尾の各氏より回答を得、被推薦者は十九名であった。編集部では、その集計をもとに六月十八日編集会を開催して検討し、佐々木佳子の授賞を決定した。佐々木作品とともに、中津川勲坐作品も討議の対象となった。ここに、選考資料となった推薦文と推薦作品を整理して掲載する。なお、推薦文は都合により省略したケースもある。

1位 佐々木佳子

日常の機微をすくい上げる発想のゆたかさ、表現の的確さが読者のこころを掴む。平易な措辞のなかに奥行きのある世界が潜んでいる。郷土津軽の歌もいい。

2位 中津川勲坐

人生を遠観したような温かさが滲む歌が多い。嘆きの歌にもユーモアがにじみ、ほのぼのとした味わいを醸しださせる。したたかなテクニシャンである。

3位 岩崎 佑太

沈静した思惟の底から湧き上がるみずみずしい情感を的確に表現する。比喩の斬新さと重厚なしらべに個性が光る。

4位 吉本 由美

対象に自己を投影して思索の深まりを見せる。自己を問う心の揺らぎや、裡なる憧れ心を垣間見せ

A・

つつも、負荷をかけすぎず無理のない自然な詠風がよい。

5位 康 哲虎

平易な日常語を用いて、人の心の深層に潜むものをスバリと衝く人間観察が鋭いのだ。だが歌に棘はなく、人間愛が流れている。

1位 佐々木佳子

日常生活を基点として、ユーモラスだったり飛躍があつたりと詠み方に幅がある。北国の自然の瑞々しさが伝わる歌が魅力。

2位 岩崎 佑太

介護の歌を通じて、生きることの切なさや愛おしさを感じさせてくれる。客観的な視点を持ちながら叙情性を失っていない。

3位 中津川勲坐

故郷を愛し、妻を慈しむ歌に和ませられる。落ち着いた詠み方であつた。枕詞などうまく使っている。

B・

4位 吉本 由美

さりげない生活の一場面や風景を切り取り、それを温かな眼差しで詠うことで対象を輝かせている。負の側面を詠まない強さを感じる。

5位 康 哲虎

口語による率直な詠み方が心地よい。どの歌も、その背後にある「社会」の存在をクローズアップさせ、考えさせられた。

1位 佐々木佳子

津軽という北の風土をその地に暮らす者ならではの眼差しで愛情深く読み継ぐ。丁寧な詠み口に誠実な人柄を感じる。

2位 中津川勲坐

自身の半生に抱えるある種の屈託が作品に陰影をもたらしている。科学に関わり続けた人の独特な世界観も面白い。

3位 吉本 由美

闊達なようで、その奥にある感情の揺らぎが作品に垣間見える。

人生の途上、どう生きるかを自らに問う作者に感銘を受けた。

4位 柴田 佳美

思春期前後の子どもたちをめぐる家族的、そして自身の有りようを個人的に表現している。「今」を大切に詠う作歌姿勢がよい。

5位 岩崎 佑太

詩的に昇華する技術は随一。年齢に比してやや老成した感があるが、今後の作品に注目したい。

1位 佐々木佳子

気持ちのたがを緩めず歌作している。方言を活用して一首に展開する工夫がある。マイナスの出来事をプラスに転換してゆく心の強さがある。

2位 中津川勲坐

表記にも意識を向け工夫を怠ら

D・

コスモス賞候補推薦・集計と作品抄

☆佐々木佳子作品……………72点

日々暮らす平生といふしあはせは蓮にころがる光の玉水

ウイルスと比べたら鬼はめんこいな豆は撒かずと夫といたたく

六十で魂を一度いれかへようパパッと作る牛丼うまし

青梅と氷砂糖の密がいい 時の液化がゆるりとすすむ

サイトサイト感染者数が今日最多あさがほの花夏にふるへる

チューリップ植えしあたりの残り雪サリッと崩る三月三日

水仙も梅も桜も連翹ももりもりと咲く津軽ふくらむ

カッコウの声にのせられ全身で梅シロップの大瓶ゆらす

せつげんと消毒によるかさかさの手に花を買ふ立春の今日

「人流」はジュラルミン的硬さもつ耳にも目にも生ずる痛み

ころなかをころがるラジオを部屋に置き祈り充たして十年がたつ

ふざけると言ふ人もある「田舎館村畑中」われ生さる場所

ひとつだけ人のひしめく星はありいつも何かと闘つてゐて

腰をやむ私だけの椅子おきたればキツチンのみで暮らしていける

ここはたぶん未来の病院だれもかも言葉交はさず眼だけが光る

春はいま山の七合目にのほり村内放送の音よく通る

☆中津川勲坐作品……………57点

母ほどに父を慕はずふたり子は力瘤なき愛を好みて

あの辻をあの日には右へ折れたなら花咲く里の花守われは

箱根にてくつろぐ妻よ歳をかさね君は「湖畔」のひとり佳いね

無理してもできぬ槍投げ無理せずにてできる投げ遣り 力まず生きる

一挺の銃改め懐しひつそりとテッポウユリになつて咲きをり

大かきをわれは教へきブレストで浮きつ沈みつ世をわたる子に

ない。難しい言葉に頼らず人物詠

に棘を立たせる技術がある。抜群

のユーモアのセンス、読者を楽し

ませるセンスを身につけている。

3位 尾崎 潤子

人物や自然の観察に冴えを見せ

る。香りにも敏感な作者。視覚に

するりと変換する。過去と現在を

うまく融合させる巧と技を持つ。

4位 康 哲虎

身の回りのものの些細な変化を

掬い上げるのを得意とする。怒り

という感情を順直にしつかりと述

べる。内に秘めたシニカルな見方

を大切にしてい一首に籠める。

5位 岩崎 佑太

想像力が豊かでしなやかである。

見ても見えないところを可視化す

る技がある。 E・

1位 佐々木佳子

何気なく使うことばに一度立ち

止まって考えてみる。そこに新た

な思いが生まれる。日ごとの生活、

季節、風土の中から鮮やかに

「詩」を引きだす技に優れている。

2位 吉本 由美

感覚的に優れ比喩表現に長けた

作者である。日常にふと現れるデ

イテールを見逃さず、丹念に詠む

ことよって、一首に深みを与え

ている。 3位 中津川勲坐

老いに向かいながら現在と過去

に思いをはせ、妻をいとおしむ。

どんな題材であっても、それにふ

さわしい表現を的確に選び取るこ

とができる作者である。

4位 吉田美奈子

関わりのなさそうながらが

イメージを通してつながることを

教えてくれる作品である。ご夫君

への挽歌はしみじみと深く読み手

の胸に沁みてくる。 5位 尾崎 潤子

家族が輪になつて、中心にいる

作者を囲んでいような作品であ

る。ニュースも地名も日々の出来

事も家族につながっていて、いず

れも温かい。 F・

1位 佐々木佳子

故郷、青森を愛する歌に惹かれ

る。上句から下句への飛躍が素晴

らしい。歌はユーモアセンスもあ

り、自身を見つめる歌もあり、パ

ラエティーに富む。

2位 中津川勲坐

病に負けず、温かい歌を詠む。

理論的な歌群の中に、妻を愛でる

みこもかる信濃へかよふ郷の路歩くかぎりを咲く谷空木
死なばごみ死なずば粗大ごみといふれんげ咲く野に今は寝ころぶ
習首席の意に従はぬひとつなれ自由の国へ飛びくる黄砂

蒼き血に入れ替へたならこの疼き少しは楽になると思ふ夜
警察で認知機能を調べられわれの小泉だけはデータとなりぬ
フレイルになると言はる日本語でよろほふことも叶はぬ日本

☆岩崎佑太作品

38点

わが胸のみづうみに棲む古代魚が飛び出すたびにしやつくりをする
かなしみの六合目付近のぼりをりこの絶頂の空を見るべし
文具屋の軒先にをりきささぎのうら若き雨の走り去るまで
歩くことたしかめながら歩く日の原爆の日のポストが遠い
新疆の読み方知らぬ弟に読み方だけを教へてゐたり
会ひたくて会へないいまは歳時記の春の部の山川にあそびぬ

われは母に母はその母に冷たくて夜のシンクは舟のごとしも
この水のどこかに消えてどこからかまたあらはれる真昼のめだか
腹しろきくぢらのやうな森の風すぎて遠くにわれのこゑする
弱りゆく祖母に一口はこびをりカスピ海ヨーグルトあるいは光

☆吉本由美作品

36点

台風に根刮きたふれふたとせを椎は朽ちつつ考へてゐる
食べるとは生きて行くことアパートの小さき窓に杓文字がのぞく
研ぐことをやめたる手もて炊飯器に無洗米おとす風の音たて
デネブ冴え翼ひろぐる白鳥座見えぬ大阪の北天あふぐ
あかあかと夕雲の領巾なびかせて西空はもう秋となるらし

野をゆらす疾風に翼もらひたる紙コップひらり鳥となり飛ぶ
ばつばつとジャンパー脱ぎすて陽の下に野球少年の羽化がはじまる
草丘に風を呼びあてて白木蓮百の小船の帆をひらきたり

☆片岡絢作品

20点

さびしさが世界に化けて出現中わたくしはいま試されてゐる

歌があつて微笑ましい。

3位 吉本 由美

いい歌を詠もうとする気持ち
が伝わってくる。魅力的な表現が印
象的。一首の中にドラマがある。

4位 柴田 佳美

日常生活の中から、題材を見つ
けて、ていねいに歌にしている。

特に娘さんを詠んだ歌が心に響く。

5位 岩崎 佑太

独特で詩的な比喻に力を感じる。
ますますの活躍が期待される。

1位 佐々木佳子

ふるさと津軽を詠む歌、家族を
詠む歌が温かく、表現が細やか。

身の回りのことを丁寧に詠むこと
で、この社会の違和を描き出し、
その観察眼が鋭い。

2位 吉本 由美

日常をさらりと詠む中に、詩が
あり、生きることへの思索がある。
大阪人らしい、ユーモアの滲む歌
も魅力。

3位 中津川勲

風刺に富んだ時事詠を詠む。老
いを見つめつつ、この一年素材に
拡がりが増し、歌の幅を広げた。

4位 吉田美奈子

繊細な感覚で、調べの美しい歌

を詠むが、突然の夫との永訣を詠
んだ挽歌は絶唱で、ストリートに
胸を打つ。

5位 岩崎 佑太

若い作者だが、陰影に富む作品
を詠み、生きる哀しみ、この世の
底知れぬ深さを感じさせる。

1位 中津川勲

視野が広く、この時代をよく捉
えている。ユーモア精神もあり、
言葉の扱い方が巧みである。理系
の知性派だが、情に厚い面もあり、
雪国生まれの湿度が感じられる。

2位 吉本 由美

作品には大阪人らしい気取らな
い生活実感がただよう。素材は身
近な些事が多いが、比喻をもちい
て詩的に飛躍する。

3位 佐々木佳子

津軽の自然風土が色濃く出てい
る。寒い土地柄だが、情感は明る
く軽やかで、パワフルなところが
ある。六十歳の節目の年で、病む
父を支える歌にも佳品があった。

4位 尾崎 潤子

亡き父、母、娘、孫などの家族
詠が温かい。病む友、複数の歌の
友の死を悼む歌もあり、情の篤い
人なのだろう。

打席からベンチへ戻るほんたうは球場をもう出てしまひたい

ひよつと手を伸ばせば繋ぎくる手ありやはらかな子の手が今もあり
サーカスのライオン使ひとわたくしと目の合ふことの時空に一度
教会へ通ふことなき人生となつてゐるのは、^{たまたま}だらう
公園に親子はかはるがはる来てやがてどの親子も来なくなる
コピー機を操作してゐるわたくしの人差し指にそそぐ夕暮れ

☆吉田美奈子作品……………19点

いづこにも寂しさの種ひそみぬてポケットの無き服ばかり選る
春はみな少しやはらかJRのアナウンスの声けふ鼻濁音

終の日の吸殻三本残れるをいまだ捨て得ず梅雨降りしきる
若き日のわが文の束見出だしぬ逝きたる夫の抽斗の奥

自が供花となるとは思ひみざりけむ夫植ゑし花切りきてひとり
自署せむに手の震顫し文字書けず死亡届の「妻」なる欄に

諦むは明らむの謂夫の死の経緯見極め胸に落とさむ

☆尾崎潤子作品……………12点

豊かなるシャンパンゴールドひかりつつ狗尾草の穂は風に揺る
戦場に出すおもひなり看護師の子が復帰する春近づけば

旧町名(月夜野)は父の壮年の頃の勤務地月美しき里
白鷺のつばさがおほふ一瞬の暗さフロントガラスの向かう

枯草のいろ濃ゆるなる雨の午後鳥のつばさも湿りもつらん
谷川の双耳峰恋ふふるさとに帰れぬ夏がふたたび来たり

☆柴田佳美作品……………9点

靴下を繕ひながら聞きぬたり娘初めて恋をしたこと
娘らの二段弁当作る朝狭きキッチン船着場のごとし

薄紙についた肉まん紅の少女の舌が攫はんとする
とびゐたる羽をにはかにをさめたる蟬は日輪そのものとなる

木の元に小鳥を埋めてしばらくを隠す雨後の緑金のなか
肉まんをあつといふ間にたひらけて孤独を恋ひて部屋に子に行く

5位 草野 正信

豪雪地帯に住む人で、風土を現
代的な視点で詠む。小さな動植物、
人間なら弱者に目がいき、ときに
シリアスな社会詠をつくる。

I・

1位 中津川勲坐

軽妙に、あるいはシニカルに事
物・事象を歌い上げる手腕の根底
には、含羞が秘められている。

2位 吉本 由美

豊かな発想をもとにした多彩な
比喩の多用が読者を驚かすが、そ
れを支えているのは(楽しさ)で
あるらしい。

3位 吉田美奈子

細やかな言葉遣いで、日常的な
ささやかな事柄までもていねいに
歌い上げつつ、そこにしなやかな
優しさがにじむ。

4位 佐々木佳子

おおむね穏やかな言葉の運びに
載せて、ふだんの生活に根差した
心の動きを、まっすぐに着実に歌
っている。

5位 尾崎 潤子

非現実と思われる出来事をもあ
えて詩的眞実として読者の前に提
示する、良い意味での遊び心がう
かがえる。

J・

1位 中津川勲坐

親として夫としての思い、後期
高齢期を迎えた思い、離郷者の思
い等を素直に表現する。題材の捉
え方に理知的な個性が感じられる。

2位 佐々木佳子

社会や自己に対していつも前向
きに生きようとするひたむきさが
作品に感じられる。詠むことで常
に心励まされているのであろう。

3位 吉本 由美

身辺の日常を題材としているが
発想は個性的である。作品には意
外性が感じられ読者に新鮮な感動
を与えてくれる。

4位 山田 恵里

過ぎ去る日常の時間を大切に生
活されている作者であるうか。見
逃しやすい出来事を捉え、豊かで
温かな作品に仕上げている。

5位 草野 正信

雪国の生活を静かに受け止め、
丁寧に観察して作品化する。慎ま
しい作者の心が作品の節調に表さ
れている。

K・

1位 中津川勲坐

ふるさとへの思いや過去を慈し
む歌はやさしさに満ち、自己を詠

☆奈良橋幸子作品……………7点

いまはむかし木のベンチにて誰れかれが眠る昼とふ時間ありける
白飯を炊きあげてこのゆふぐれに一人去にけることを忘れむ
にちえうの夕暮れにしてしくしくにこころ疼けど具体を成さず
螢袋ぼんやり咲くを鳴神の来るとふ午後の往還に見つ
明日のためまなこを開ぢよさりながら月に招ばれて月を見にゆく

☆有川知津子作品……………6点

母のこゑ月のひかりのなかり来知るはずのない母のうぶごゑ
この冬も風のなぎさとなりけん祖母の花壇のキルトンサスは
忘れし胸びれうごく無風区のメタセコイアのうすかげのなか
ますくすればほゑみやすく仕事日は眺しわんとやさしくなりぬ
糸でんわの糸をつたはるやうなこゑ聞こえて今年はじめての蟬

☆山田 恵里作品……………5点

我が非力愛でのごとくに助手席の夫が下ろすサイドブレーキ
二十年前の娘を抱きしめて目覚めき心弱りたる今朝
雨粒は水面に触れるまでの生 人にもあらむ触れしちの生^よ
ほうはりとするきが揺れて昨日より少し狭まる秋の橋ゆく
北向きのつぼみを開きハクレンのメゾソプラノが空に放たる

☆康 哲虎作品……………4点

寅さんの「とらや」かサザエさんの家下宿するなら「とらや」にします
ゴミ箱に丸めて捨てた悪口を火曜の朝にカラスがつつく
ケアマネが来れば背すじを伸ばす父半時間だけ達者になりぬ
ロッカーにもたれて座る午後六時くつ下の先の穴に気付けり

☆梅田 陽介作品……………3点

三度目のヨイショで開く樽酒は杉の香りのつきて旨しも
切り返し・仲仕事・仕舞仕事して製麴終はりの朝の清しさ
弾力を持ちて我が指押しかへす浸漬^{しんせき}上手くいきし蒸米^{せんまい}
青冴えの新酒を利けば総身を駆け跳ね巡り抜ける吟醸香^{ぎんかうか}

む歌には諧謔性があり自然体。

2位 片岡 絢

仕事と子育てに奮闘する中、子
に癒やされ、太陽や風と一体化す
るスケールの大きさに新鮮さがあ
り魅力となっている。

3位 佐々木佳子

意外性のある発想や場面の展開
に独自性がある。自然を詠んでも
ただの叙景歌で終らせない視点が
楽しい。

4位 有川知津子

ふるさとを詠み、亡き祖父父母の
思い出を詠む一首一首には体感が
あり、詩情に溢れる。

5位 奈良橋幸子

文体に独自の世界があり、それ
ぞれの作品から余情が立ち上がる。
L・

1位 岩崎 佑太

繊細で美しい歌に魅了された。
古いようで新しい、新しいようで
古い永遠につながるひびきを感じ
た。

2位 中津川勲坐

肩ひじを張らず来し方を、今を
詠んだ歌にはある時は男のさびし
さをまたある時はすべては歩んで
きた人生と受け止める男の矜持を
感じさせた。

3位 梅田 陽介

この一年の作品は一人の男性の
ドキュメンタリーを見るような思
いで読んできた。杜氏として働く
酒蔵の職場詠も魅力的であった。

4位 吉本 由美

日常で得たささやかな詩情を手
でそっと包みあため開花させた
ようなこの人ならではのやさしい
歌に心ひかれた。

5位 杉本 なお

時折みせるちよつとメルヘンな
発想が楽しい。

1位 岩崎 佑太

日常を静謐な言葉で詩的に詠む。
自分の内面や家族などを細やかに
詠んだ歌からは、優しさと同時に
鋭さを感じる。

2位 佐々木佳子

日常の中の発見を独自の発想で
歌にする。勢いとユーモアがあり
魅力的だ。

3位 田中 泉

子どもとともに過ごす日常から
生まれた歌は、新鮮な発想や発見
があり、特に惹かれた。

4位 杉本 なお

独特な感性が光る歌が多い。力
の抜けた詠みぶりは等身大の作者

☆杉本 なお作品……………3点

肅々とレジへ流るる行列に鮎のかたちの和菓子も泳ぐ

あの木なら登れさうだな分別を少し手放すことができたなら
今までに咲かせた花の思ひ出を花瓶が語りだす夜もあらむ
地図上のわが家も川も図書館も蟻がまつすぐ踏み越えてゆく

☆田中 泉作品……………3点

子どもらがつぎつぎ登る樹は長く生きているのだらう子どもらよりも
母われは助走することなくなりぬ桜はいつのまにか葉桜
星型のスパンコールが散つてゐる子らが遊びし雨の日の部屋
近くても豊かなる旅 水仕事しない私が港を見る

☆草野 正信作品……………2点

ひさびさに授業をすれば脳内の重き水車が動き始める
鬱の気へ傾くわれの胸にいるインコと終日密にて過ごす
水鳥のほほをかすめて来し風と思えば親し春の川風
大海に出れば溺れん小蛙のわが生涯を雪国に置く

☆三浦 陽子作品……………2点

柿の葉はカサリカサリと積もりゆき爪先ばかりが冷える夜なり
はじまりは小さき促音くさの芽もうぐひすの音もそして別れも
どうにでもなれと言つたか言はないか大雨の昼白蝶が舞ふ
息ながく吐きつつフラを踊るとき指さきに聴く遠い潮騒

☆中村 敬子作品……………1点

秋天に薄手の雲のマスクして母がふはりと笑つてゐたり
目を閉ちてしまつた父の目頭に木洩れ日ほどのひかり遣れり
逆縁はもう無き今よきしきしと介護の日々の悔いはあれども
☆金子智佐代作品……………1点

米軍の射撃場だつた 邑ちかくファントム飛んだ 五十年まへ
うろくづのあぎとふごとく砂うごくこが源頭 沢田湧水地
コロナ禍の籠り居ながく目のまへの男の口はしみじみへへのじ

が見え、好感を持つ。

5位 柴田 佳美

日常の出来事を丁寧に掬い取る。
比喩の歌に独自の感覚がよく出て
いて印象的だ。

N・

1位 片岡 絢

作者は今、子供と二人で生きる
道を選んで人生の転機を迎えている
が、シリアスなその日々を、思
いもかけない方法で詠う。身に備
わつた天性の視点を持つ人だ。

2位 岩崎 佑太

大学院での研究の日々、また、
祖父母を支える暮しの中から詠ま
れた作品。その一首一首に、独特
の沈思の気配があつて、文学的な
香気に充ちている。

3位 有川知津子

ふるさとの鳥や、亡き祖母や家
族への思いを詠う。その一方には
生来の芸術指向による精神活動の
広さや深さがあり、作品の底荷と
なっている。

4位 尾崎 潤子

自己主張のほとんどない客観描
写の奥から、家族や周囲への思い
が伝わり、眼差しの深い作品質だ。
歌も人生も、ゆつくりと時間をか
けて育てる作者像である。

5位 金子智佐代

対象への関心に充ちて、輪郭の
くつきりとした歌を詠む。環境や
日々の生活の歌にも社会的な眼が
働いているが、シャープな中に、
心情のあたたかさがある。

O・

1位 奈良橋幸子

和語、古語を巧みに用いて、感
覚的世界を見事に詠む力量は屈指
である。近年幻想的な世界を詠む
こともしばしばであるが、これも
また実に魅力的である。

2位 吉田美奈子

夫君の急死の後詠まれた挽歌の
数々は、哀切に満ち満ちている。
そしてまた、短歌という詩型とし
て美しく昇華されている。

3位 山田 恵里

感覚的な把握に鋭いものがある。
また比喩表現も卓抜で、さらなる
深化が期待できる。

4位 三浦 陽子

発想が豊かで、詠む対象も幅広
く、詠むことの楽しさを実感させ
てくれる。

5位 中村 敬子

ご両親の最後の日々を哀切に詠
んでいる。思いやりの深さがにじ
み出てくる詠いぶりもよい。